

「芸術の力」を考える

1 理系教育と芸術教育（音楽）の濃密な関係

- ・ MIT メディアラボ
- ・ 学生の研究交流のためのシーモア・パパート教授研究室（プログラミング言語レゴ）と B. マコーバ教授研究室（コンピュータ M 研究）との意図的配置。
- ・ ハーバード大 R. コーガン教授（現代音楽の第一人者）談

「なぜ科学教育に芸術教育が必要か？偉大な科学者たちはそう考え実行してきたし、また私たちがそう考えるから。そもそも芸術が人間にもたらす効果がわかるとすれば、人間の脳についてほとんどがすべてわかったときであり、科学研究の課題の半分が終わった時。だからそのようなことを考えるべきでない。その理由をつくらばつくるほど芸術の価値をさげる。音楽が人を癒すなどという理由はもともと意味なし。あえてその必要性を私流にいうならば、一般に科学研究はロジカルなバーバルの世界と考えられがちだが、科学研究は芸術と同じ直観の世界（ノンバーバルな直観の世界）、科学研究に必要な直観力を芸術は支えるのである。」（2012 年 7 月、留学生たちへの講演から）。

2 日本の芸術教育（音楽）の特徴

- ・ 欧米の芸術教育（音楽）は、「味わう」＋「演奏」。日本のように「表現領域 3 分野と鑑賞領域」を学ぶことができないことが課題に（「表現領域 3 分野と鑑賞領域」のすべてを教えられる教師と日本のような教科書の不在（全米音楽教育指導者会議 2008））。
- ・ 韓国、台湾、マレーシア、中国、タイ、カンボジア→義務教育段階で日本型芸術教育（音楽）の重要性を認知。
- ・ 芸術教育（音楽）を手段（音楽の三つの力：深層記憶性、感情同質性、身体規範性の応用）に。例 タイ、マレーシア、カンボジア、中国

3 芸術教育（音楽）を喪失すると

- ・ 国民を「錨のない船」（母港のない船）に乗船させることに（加賀乙彦）→芸術は言語と同じ、民族特有のもの。国際化、STEAM 化だからこそ芸術教育が重要に。
- ・ ネガティブ・ケイパビリティ（答えのでない事態のなかでそれに耐えうる力）→まさに現代社会そのもの、ネガティブ・ケイパビリティを育てる力は「共感」と「芸術」（芸術には答えがない）。（帚木蓬生論）